

平成26年2月3日、市長と政策秘書課職員との話について紹介します。

## あいさつ

市役所では、一昨年6月以来、副市長、部長数名が、自主的に毎朝、職員の出勤時にあいさつ運動を行っています。

あいさつ運動は、「あいさつをすること」そのものが目的ではなく、あいさつをきっかけに、上司は職員に対して、「仕事、頑張っているね」「元気か？」などの声掛けをしてもらうためです。上司が、きちんと自分のことを見てくれていると感じると職員は頑張ることができます。

同僚同士でも、「おはよう。今日は元気がないね。どうしたの？」などの会話から、悩んでいる同僚の気持ちを軽くすることができるかもしれません。

職場だけでなく、家族同士、近所同士でも同じことが言えると思います。

市役所から地域へ、そして市民同士へと「あいさつ」の輪を広げていきたいのです。



## まざって暮らす

私が以前、介護の仕事をしていたとき、高齢者だけの場所に、あえて子どもや学生、近所の人、ボランティアを入れて「地域」を作ってきました。高齢者の中でも、特に寝たきりの人は、今日も明日もお世話をしてもらわないといけないので、いつも「ありがとう」「申し訳ないなあ」と頭を下げてばかりいます。つつせがないのです。ところが、さまざまな年代の人が「まざって暮らす」と、高齢者が持っている生活の知恵が生かされ、子どもたちは周りを笑顔にするなど、それぞれにつつせがあり、いきいきと暮らすことができます。

長久手市全体で見ると、既に「まざって」はいます。しかし今の状態は、ただそこに「個」があるだけで、「まざって暮らしている」とは言えない状態です。「コミュニティが大事だ」「つながりが必要だ」と言われていますが、長久手市をはじめ日本中の多くのまちは、「個」の集まりであり、「地域」ではないと感じます。

「個」が「地域」になるには、何が足りないのでしょうか。

市民のみなさんの多くは、お互いに全く知らない者同士です。知らない者同士が、いきなり支え合うのは無理な話です。

知らない者同士が、つながって、「地域」になるための第一歩が、「おはようございます」といったあいさつ、そこから生まれるちょっとした声掛けだと私は思います。福祉では、一番大切なことです。

知らない人にあいさつをするのは、気恥ずかしいことかもしれませんが、あいさつには、お金もかかりません。市民と職員、市民同士の垣根を低くすることができる第一歩です。まずは家庭から、職場から、そして隣近所と、その一歩を踏み出してもらえたらと思います。

～市長の話を聞いて～

最近、近所を出歩く際は、相手を知っていても知らなくても、すれ違う人とあいさつをするようにしていますが、「特に高齢の男性は、反応がないなあ」と感じていました。

そんなとき、高齢の女性から、「小さい声であいさつをされても、実は聞こえていないのよ。もっと大きな声ですか、手を振ってもらえるとうれしい」という話を伺い、「もしかしたら、あの人も聞こえていないだけかも…」と納得しました。

相手から反応がなくても、「聞こえなかっただけかも」と思って、あいさつし続けることで、“近所なのに、全く知らない人”から“顔見知り”にへと、徐々に昇格していく人が増えると、防犯の面からも心強いかもしれません。